発掘速報展 高田遺跡

主催：高知県立埋蔵文化財センター（公益財団法人 高知県文化財団）

弥生時代集落と土器棺墓

高田遺跡では平成27年度～30年度にかけて、国土交通省四国地方整備局の計画する南国安芸道路の建設に伴なって発掘調査を実施しました。遺跡は、物部川東岸の河岸段丘上に広がり発掘調査では、弥生時代～中近世にかけての遺構・遺物を確認しています。発掘された出土品は、埋蔵文化財センターに持ち帰り、令和2年度まで整理作業が行われ、平成29年度に『高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡』、令和2年度には『高田遺跡Ⅱ・東野遠山遺跡』の報告書が公刊されました。

発掘された集落跡

発掘調査では弥生時代後期後半頃の集落跡が見つかりました。確認された竪穴建物跡は13棟で、平面形は円形ないしは方形で、直径は5～7m前後、柱穴は4～5本からなり、中央には土坑を伴います。検出面から床面までの深さは30cm程度で、後世の耕作などにより上部は大きく削られ、失われています。

弥生時代の竪穴建物

竪穴建物跡などからは甕や壺、高杯、鉢、石包丁、袋状鉄斧が出土し、物部川を望む高台に小規模な集落が分散的に営まれていたと想像されます。

その他、建物跡の周囲では6基の弥生時代後期の土器棺墓が確認されています。その内の一つは、やや大ぶりの壺の上部を打ち欠き、棺とし、高杯を蓋に代用し、底石を据え、やや傾斜させた状態で埋められています。土器棺の大きさからは、幼児などを埋葬したお墓の可能性が示されます。

土器棺墓

中世墓の世界

弥生時代の土器棺墓の他に、遺跡からは平安時代の土坑墓や鎌倉時代の火葬の痕跡も確認されています。土坑墓の平面形は隅丸長方形(長軸：2m ×短軸：1m 前後)で、内部からは須恵器の壺や土師器の杯、刀子が出土しており、時期は 10 世紀後半頃と考えられます。不明遺構とされる土坑のなかにも鉄製の紡錘車や刀子を伴うものがあり墓と考えられ、周辺には複数の土坑墓が存在したと推定されます。

火葬痕跡は、平面形は隅丸長方形(長軸：1.5m ×短軸：1m 前後)で、土坑の底には石の集石が確認されています。石の表面は熱を受け赤く変色し、炭化した木材片や焼土、人骨、鉄釘、土師器の皿などが出土しました。上部は削られ、残りが悪く不明な点も多いですが、土坑の底に石を並べ、その上に薪や棺を置き、火葬を行ったと考えられます。時期は 13 世紀頃と考えられ、県内における中世の火葬痕跡としては貴重な事例です。

土坑墓

火葬痕跡

火葬は 7 世紀中頃の「大化の薄葬令」による埋葬・葬礼の簡素化と仏教思想の流入などにより行われた 7 世紀末～ 8 世紀初頭の僧道昭や持統天皇の荼毘(火葬)を初源とします。

当時の埋葬の主流は土葬にあり、上層階級や僧侶等の間で行われていた火葬は古代の終わり頃には一度下火となり、中世に入ると再度、受容され、その後は武家社会などに広まります。

古代の高田遺跡

遺跡では奈良～平安時代にかけての複数の掘立柱建物跡や畿内の器を模倣した赤彩土師器、緑釉陶器などが確認されています。畿内の土師器を真似、赤彩された食器類からは、都城での儀礼を地方でも忠実に行った様子が想像されます。

特筆される発見は「古代の道路遺構」です。側溝である並行する二条の溝に挟まれた幅 10.4m の道路跡が、東西約 170m の範囲で確認されました。

道の規模、立地などから沿岸部を東西につなぐ幹線

古代の土器(右：赤彩土師器)

道路「古代官道」と考えられます。これまでに確認された道路遺構の中では県内最大規模で、五畿七道にある「南海道」の可能性が高い遺構と言えます。

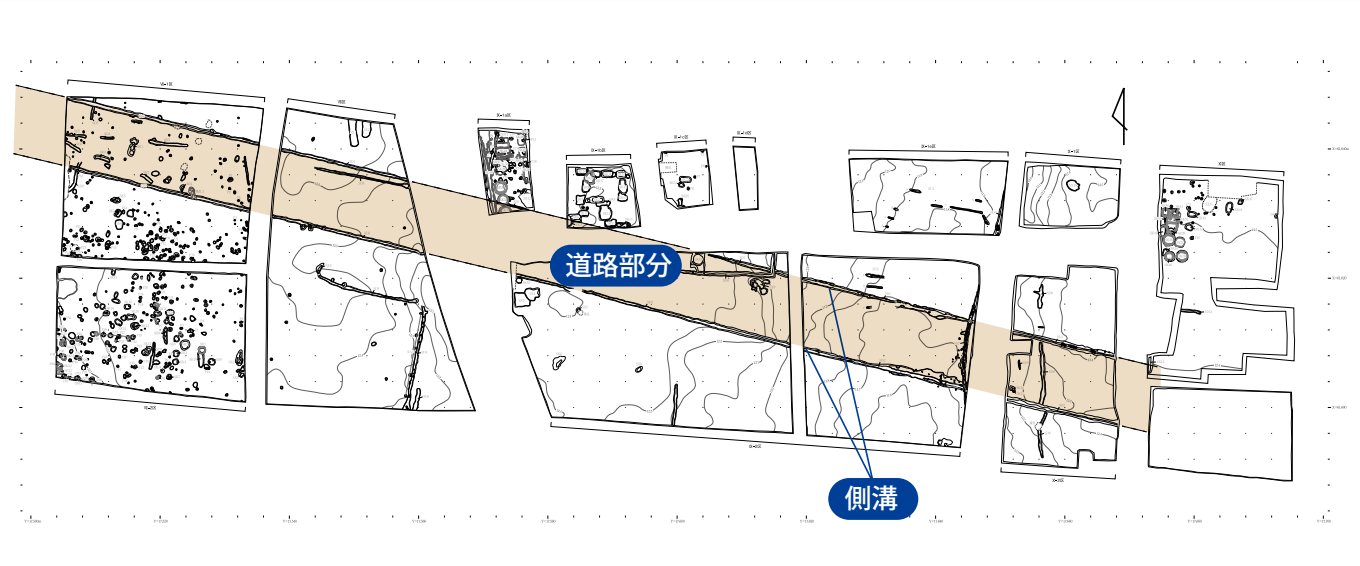
古代官道は、地形などを目印に直線的に造られるのが一般的で、高田遺跡では、物部川東岸の上岡山の独立丘陵を目印に道の計画線が設定されたと考えられます。

官道には三十里ごとに駅家が置かれ、道の修繕や側溝の溝さらえなど、定期的な維持管理が行われていたとされます。高田遺跡の「道」は、周辺の建物跡や出土土器との関係から奈良～平安時代の8世紀～9世紀前半頃に活発に使用され、10世紀前半頃までは機能していたと推定されます。それは都と地方とをつなぐ道として様々な人や文物が往来したと想像されます。

高田遺跡とその周辺

道路遺構（西より）

古代の掘立柱建物跡



道路遺構等の平面図（縮尺不同）

古代官道と東西の交流

高田遺跡の古代建物群を東に眺めながら、物部川を北上すると奈良時代の複数の大型建物や八稜鏡、製塩土器などを確認した下ノ坪遺跡に到着します。同遺跡は官衙（役所）であると同時に川湊としての機能を有していたと考えられます。両遺跡の位置する物部川の河口東岸は、陸路（官道）と外洋からの海路の結節点にあたり、東西物流の中継・交流地であったと理解されます。

高田遺跡の「道」を東に向かえば、古代の掘立柱建物跡や畿内産土師器、円面硯、複弁蓮華文軒丸瓦が出土した東野土居遺跡があり、古代官衙に関係したつながりが見られます。西方面には、海路では大湊を経由して浦戸湾から大津へとつながり、陸路では平野部を抜け、いずれも土佐国の中枢である国府・国分寺につながります。

物部川東岸の景観（北より）

「官」銘の墨書土器
（土佐国衙跡）

複弁蓮華文軒丸瓦
（東野土居遺跡）

推定される古代道（抜粋）と海路

奈良・平安時代に各地に任官された国司は定期的に国内の巡視を行ったとされます。土佐国に赴任した国司も東方面への巡視にはこの「道」を通った可能性が考えられます。やや時代は後ですが『土佐日記』の作者である紀貫之も馬に揺られながらこの道を、あるいは船上から浜辺の松原や南海道の往来を眺めていたことでしょう。

発掘速報展「高田遺跡」開催期間：令和３年４月25日～７月４日　主催：高知県立埋蔵文化財センター（公益財団法人高知県文化財団）
発掘調査時の関係機関・展示協力：国土交通省四国地方整備局、高知県、高知県教育委員会、香南市教育委員会、高知県立歴史民俗資料館
後　援：NHK 高知放送局、高知新聞社、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、KSS さんさんテレビ
発行年月日：令和３年４月25日（印刷：川北印刷株式会社）※参考とした文献・報告書等の記載は紙面の都合上割愛した。